

序

回想 「歴史地理の学会をつくろうじゃないか……」という話がちかけられた。それは新田開発の本格的な研究で学位をとった意気さかんな菊地利夫さんからだった。しかし正直なところ、わたくしは歴史地理学の焦点を多少ちがった形でとらえていた。ところが「……そういう考えだっ
ていいじゃないか」と、うむをいわさずわたくしを引きずっていつてしまった。それから十二年。
いまもこの学会には排他的な学風はない。学ばつなんて毛ほどもない。学会の腹は限りなく大きい。

自 讃 本学会はまことに腹が大きく、内容また多彩である。たとえば領域を日本に局限するな
どという愚はやらない。はじめ学会名に「日本」とつけていたが、第四年目には「アジアの歴史地
理」を主題にとり上げている。とかく陥り勝ちな近世偏重にもならず、先史時代から明治期にわた
っている。そのことは十一冊に及ぶ紀要と、各巻の末尾を飾る口頭発表者のテーマを参照されれば
明白である。ともかくこれは会をスタートさせた菊地さん、その菊地さんの腹をもう一まわり大き
くした浅香山幸雄会長、学会をしょって立っている中田栄一さん、このトリオを中核とした会員のも

たらしめた輝やかなしい成果である。

自戒　ところでわれわれは、ここらでもう一度初心に帰り、歴史地理学の本質、地理学の全分野での位置づけを真剣に考え、整理して見る必要があるであろう。わたくし自身の考えを端的に言えば、歴史地理学は地理学の諸分野と並列するのではなく、それらと交差し、横断し、重合するものであり、地理学を社会科学として強く性格づけるものとして再構成さるべきであると思うのである。

ついでに技術面についていえば、地理学一般の技術は必要に応じ、積極的に大胆に導入したい。たとえば条件としての地形の知識を古い時代についてはもっと大幅に取入りたい。新しい時代には統計資料を、また空中写真や大縮尺地形図などは縦横に活用する気運をつくりたい。こうして社会科学としての地理学に関心を持つ学徒なら、どうしても無視できないという学会ならびに紀要に、現在以上に飛躍させたいものである。

一九六九年五月

籠瀬良明